

〈ケア〉を考える会 (第172回)

■日時：2024年2月4日(日) 13:30~15:00

■会場／参加方法

①「宅間歯科医院」の3階

京都市下京区万寿寺町 137

地下鉄「烏丸五条」駅1番出口から東へ250m

歯科医院の建物の裏側(北側)階段から3階に上がる

② オンライン (Zoom) ……会場より発信します

■当日の大まかな予定

13:00 ⇒ 有志集合…会場準備等

13:30~ ⇒ 読書対話

15:30頃~ ⇒ 懇親会

17:30頃~ ⇒ 片付け、終了

■内容：読書対話……本を読んで対話します

『治したくない ひがし町診療所の日々』

(齊藤道雄著 みすず書房 2020年5月刊) 161頁~202頁

この本を読んで、〈ケア〉の奥深さを知り、そもそも〈ケア〉ってなに
ということを考えずにはいられない

■懇親会：15:30~17:30……食べながら飲みながら語り合います(持ち込み歓迎)

■参加：どなたでも参加できます。初参加歓迎。参加費無料(懇親会参加者は2,000円)

■申込／問合せ：林道也まで ⇒ michi-care@outlook.jp 090-5366-1497

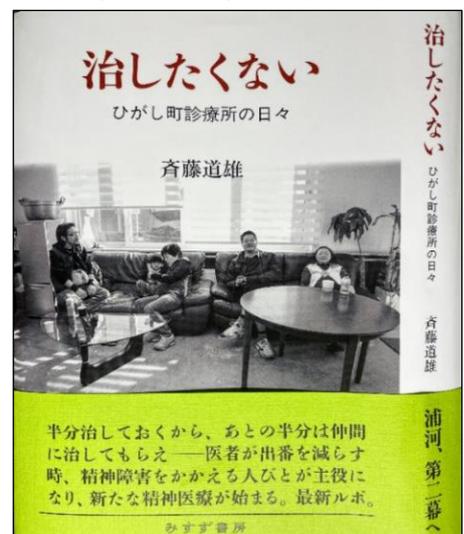
※会場参加者は申し込みが必要です

『治したくない』(本書から抜粋)

▼早坂潔さん(…)。さんざん入退院をくり返したけれど、七年前に退院してから早坂さんは再入院していない。(…)。暗中模索のころ、早坂さんの顔を見ながらふっと、ことばが川村先生の口をついた。「半分直したから、あとの半分はみんなに治してもらえ」。(…)。早坂潔さんは、薬だけでよくなったわけでも、先生ひとりのおかげでよくなったわけでもなかった。たくさん仲間がいて、薬も入院の経験も、苦労もことばも何もかもぜんぶひっくりめたところで、いまのようにしあわせになった。(180-192頁)

▼仲間、友だち、当事者グループ。それはまず、AA(アルコールリクス・アノニマス)などと呼ばれるアルコール依存症の人びとの集まりだった。人々は、そこで、仲間の力を借りて回復への道をたどる。もちろん治るといっても、本人は厳しい道筋をたどらなければならないし、治ってもむかしの自分にもどれるわけではない。けれど医者が出番を減らし、当事者という存在が大きくなったとき、はじめて道は開ける。(194頁)

▼川村先生がアルコール依存症患者から学んだとき、先生は開かれていた。当事者を中心にしなければと考えたとき、当事者に対して開かれていた。(…)。あらかじめ用意された規範や基準をあてはめ、判定を下し批判するのではなく、そこに何があるんだろうとのぞきこむ、そういう形で開かれているのである。(…)。開かれているということは(…)ときには自分を捨てる用意があるということだろう。(…)。相手が閉じていてもまず自分を開く。(200頁) ▼精神障害はすべてを超えたところで、人と人のかかわりの再構築を求めている。その求めに対し浦河の人びとは自らを開くことで対処しようとしてきた。(201頁)



■おたがいの言葉を手がかりに考える時間をもつこと、確かめながらゆっくりと考える時間を共にし、分け合う。「考え」でなく、「考え方」をお互い共有してゆく。対話には結論はありません。プロセスをゆたかにできなくては。(長田弘『なつかしい時間』191頁)

■わたしたちはじぶんのいのちが他のいのちとの交換のなかにあることを知らされる。(鷗田清一『老いの空白』227頁)

〈ケア〉を考える会 Zoom ミーティング

▼ミーティングID ⇒ 823 8391 6541

▼パスコード ⇒ care117

■ 3月例会:3月10日(日)13:30~ 「よりあい場あ(BAR)ねむの木」で開催予定(Zoom オンライン有)

■ 4月例会:4月7日(日)13:30~ 「よりあい場あ(BAR)ねむの木」で開催予定(Zoom オンライン有)